

論文

《差異》を生きることばの教育へ

〈わたしたち〉という語られ方が語る意味

鄭 京姫*

概要

本稿は日本語学習者が語る〈わたしたち〉という語られ方に注目し、その意味から《差異》を生きることばの教育へ展開していく日本語教育の課題について述べることを目的としたものである。〈わたしたち〉の意味は、「差異」をもったままとして絶対化されており、〈わたしたち〉と「日本人」を分け隔てる境界が作られていた。さらに、〈わたしたち〉の中の「他者」をカテゴリー化し、序列化していく「差別構造」を乗り越える必要性が示唆された。それは、「日本語」を「日本人」のものではなく、一人ひとりの「日本語」といった「自分の日本語」への転換であった。その中で〈わたしたち〉は〈わたしたち〉を乗り越え、「わたし」に近づいていくことが明らかになった。その上、「〇〇人」という「差異」から「わたし」と「他者」という《差異》を生きる「自分のことば」の教育への展開を主張した。

キーワード

物語、差異、ライフヒストリー、ことばの教育、自分の日本語

1. なぜ〈わたしたち〉を語るのか

「私は〇〇人である」と、人は何の懸念も持たずに語る。つまりそれは、人は多様な社会集団で構成されているという「意識」¹で生きているからで

* 早稲田大学日本語教育研究科 (hime_0404_4@yahoo.co.jp)

1 私がここで「意識」と捉えるのは人々の「知識」、もしくは「常識」とされた概念

あろう。多くの人は、自分の名前より、「私は〇〇人である」と括り、自分がある集団に所属しているという「意識」により語るのである。そのように自分を何らかの集団に所属させ、集団の感情や価値に意味づけを行うことを社会的アイデンティティ² (Tajfel, Turner, 1986; ホッグ, アブラムス, 1988/1995)であると呼ばれる。社会的アイデンティティは、ある集団の成員の一員である自分の価値や意義を認識して得られることができる自己概念の一部である (Tajfel, 1981, p. 255)。それゆえ、自分が所属されたその集団への評価は自分の評価や価値づけであり、自分が所属された集団を外集団より高く評価³する特徴を持っているとされる。Turner (1987) においても、人は自分と似た他者との間に内集団 (in-group) というカテゴリーを、差異が大きい他者は外集団 (out-group) というカテゴリーをそれぞれ生成し自分を捉えていることが述べられていて、自分と似た集団は内集団に肯定的な感情を求めることがあり、外集団と比較し自分が属している内集団をより優れていると捉える傾向があると説明している。このような社会的アイデンティティ理論に基づくと、〈わたしたち〉というカテゴリーは自分と似た他者との集団であり、新たな社会的アイデンティティを形成していることでありと解釈できる。したがって自分と似た集団である〈わたしたち〉を外集団より優れていると捉えなければならない。ところが〈わたしたち〉を外集

としての考え方である。むしろ、社会学や社会心理学においてすでに自己を社会的カテゴリーに分類することとして「自己カテゴリー」を説明しているが、私はあえて上記の意味が込められた「意識」と述べる。

2 社会的アイデンティティ理論は、「個人的アイデンティティ」と「社会的アイデンティティ」に分けて説明される。

3 個人が社会的アイデンティティを獲得するには、まず、内集団と外集団を区別するため、その分類の基準となる他者のカテゴリー化が行われる。ところが、他者のカテゴリー化は容易ではない。そこで国家や階級のような社会的に地位、勢力を持ったカテゴリーが用いられ、他者のカテゴリー化を行う。それを「社会的カテゴリー化」と呼ぶ。この「社会的カテゴリー化」は、内集団評価のために必要であるとされる。人には肯定的な社会的アイデンティティを獲得したい願望があり、そのため自分が属する内集団には好意的である一方、外集団には非好意的な態度や行動である「内集団ひいき」起こし、内集団が外集団より優れていると認識している (ホッグ, アブラムス, 1988/1995)。

団より優れているという感覚がなく、常に「差異」をもったままの〈わたしたち〉というアイデンティティを形成している日本語学習者の語りに私は直面したのである。

私の研究は日本語学習者の「日本語人生」をライフヒストリーインタビューにより聞き、日本語教育のあり方を探ることであるが、その中で「わたし」ではなく〈わたしたち〉という語られ方に注目するに至った。「わたしたちはそうですね?」「わたしたちはそうでしょう?」彼／彼女らは目の前にいる私に向かって「あなたはわかるでしょう?」と言わんばかりの表情で、自分の悩み、人生、日本語、生活を語る。そして、その話を聴く私は頷いたり、共感したり、考え込んだりした。私は、いつの間にか〈わたしたち〉としてその場にいた。

調査を行う「研究者」という立場で彼／彼女らの前にいる私は、「留学生」であり、「外国人」であり、ときには「同国の人」である。さらに、彼／彼女らと同じ立場、もしくは同じ経験を有している「当事者」でもある。それゆえ〈わたしたち〉という語られ方をしているのだらうとインタビュー時にはそう考えた。だが、日本語学習者の「日本語人生」という物語の聴き手であり、語り手である私は彼／彼女らの物語が何を問いかけているかを絶えず自分に問いかけ、日本語教育の課題に直面させられた。なおかつ、その〈わたしたち〉という語られ方が語る意味、そのように語るのは、きっと語るに値する何かであると考えに至った。

本稿では、バートルさんの物語を取りあげる。その理由は、バートルさんの言葉はなぜ私が「日本語人生」を聴いていて、本研究がバートルさんに、そして日本語教育で何ができるか、その答えを発見していかねばということを考えさせてくれたからだ。バートルさんとのインタビューは、彼が在籍している専門学校で「日本語人生」を語るインタビュー어의募集のチラシを見た彼からの連絡がきっかけである。そして、インタビューを受けたいと思った理由をバートルさんの自宅で行った2回目のインタビューで彼は聞かせてくれた。

〔研究協力の〕チラシを見て、ずいぶん悩みました。なんか、僕の話がどのように聞こえるか、僕の話が研究に役にたつかどうか——ということも考えたけど、でも…、なんか僕たちのような留学生の話聞いて、それを研究することは——、あの…もしかしていいかもしれな

いと思ったし、なんか僕も話していると少しは自分の、なんか自分の疑問のようなことをわかるようになるかもしれないと思って…。

〈わたしたち〉であるから語ってくれたこと、〈わたしたち〉だからこそ解決できることがきつとある。このような問題意識から始まった本稿は、その〈わたしたち〉という語られ方に注目し、日本語教育のあり方に迫ることとする。まず、〈わたしたち〉をなぜ語り、その意味と問題を追い、〈わたしたちの日本語〉と「日本人の日本語」といった二分化、序列化している「日本語」の問題と、その日本語を乗り越える必要性を論じる。その上、「差異」⁴を乗り越え、多様な人間関係を築くことばの教育の可能性を考察する。終章である5章においては、4章を踏まえ、総合的な考察と結論を述べる。

2. 分析方法と概要

バートルさんとのインタビューは、2007年9月、2007年11月、2008

4 本稿で取り上げる差異の概念について説明を行おう。他のものと違う差違の意味としての差異は括弧を開き、そのまま記す。「差異」は、二分化され、序列化された意味としての用いることとし、生きることの文脈で分析、考察された意味は《差異》と記す。したがって「差異」とは区別する。また、差別についてだが、差別がどのように正当化されてきたのか、差別とは何か、それらは必ずしも客観的には定義できないのである。差別の辞典的意味を見ると、『社会学事典』においては、「ある集団ないしそこに属する個人が、他の主要な集団から社会的に忌避・排除されて不平等、不利益な取扱いをうけること」(三橋, 1988, p. 337)とされており、『政治学事典』においても、「社会生活の中で行われる差別待遇を指す。具体的には、差別される側が差別する側からの蔑視や加虐などにより、不平等、不利益な取扱いを受け、人権を侵害されること」(フェルドマン, 2000, p. 406)であると述べられている。『差別構造』で有名なメンミ(Memmi, 1968/1971)は差別に関して、「差異」が個人と集団を「差異化」することであり、異質なものへの嫌悪を媒介に他者への拒否を呼び起こし、「差別主義」が構成されていると述べている。差異や種類別によって分けることが区別(distinction)であり、狭く限定した概念が差別であるとされるが、「差別」の構造があり、「差異」を感じ、また「区別」自体が差別であると捉える。したがって本研究では、好井(2007)が述べているように「差別はまさに、「わたし」が他者と繋がりとうするベクトルを完全に遮断する力」(好井, 2007, pp. 59-60)であると捉え、さらに、「差別表現を含む心的構造としての差別」(池田, 1992, p. 14)の側面を重視する。

年1月の3回、計8時間行われた。冒頭でも述べたように、本研究は「日本語人生」という枠でインタビューを試みた。その理由は、学習者がどのように日本語を学び、考え、日本語を学んできたか、その人生全体で日本語の意味を考えていくことが必要であると考えたからである。さらに、本研究では、語られた経験や一つ一つの出来事を結びつけて「物語」と捉えている。物語の基本単位である出来事（野家、2007）は、「すでに起こった出来事だけではなく、近い将来・実際に出来事になるはずの行為」（ベルトー、1981/2003, p. 62）として考える。

インタビューは、非構造化インタビューとナラティブインタビューを援用した。インタビュー後はテープ起こししたものと内容を語り手に確認してもらい、分析には、ICレコーダーで録音したインタビューを書き起こし記述したもの、及びフィールドノーツを使用した。分析方法は、「何を語るのか」ではなく、「いかに語るのか」である（Riessman, 1993）ナラティブ分析（Narrative Analysis）を用いた。それによって、語り手が出来事をどのように意味づけているかというその意味の発見が可能になるナラティブ分析が適切であると考えた。一連の分析の作業は、まず、「語りの基本特徴である時系列」（Brunner, 1990/1999）を重視し、一人ひとりの「日本語人生」の時間的（「temporal」）順位に即した出来事を抽出した。そして出来事に対する語り手の評価の側面も重視し、出来事と出来事の因題的（causal）な結びがあったとされる語りを抽出した。その上で、「小見出し」をつけ、検討すべきトピックを抽出し、内容を掘り下げていく作業として「焦点を絞ったコーディング」（エマーソン、フレッツ、ショウ、1998, p. 303）を行った。

なお、語りからの引用は〈 〉で表記する。インタビューには仮名のもと論文の公表の許可を得ており、年齢、職業はすべてインタビュー時のものである。

3. 礼儀正しいモンゴル人として

「モンゴル人」。

それは一つの範疇にすぎない。人間が作り出す固定概念の裏には複雑で多面的な人間像がある。バトルさんに出会い、私は心の底からこの思いが込

み上げてきた。

【サインバイノー [こんにちは]】

バートルさんの奥さんが笑顔で迎えてくれた。バートルさんへの1回目のインタビュー後、約2カ月経ったある日、私は自宅に招かれた。その理由は奥さんがぜひ私に会ってみたいということだったらしい。日本語で「スレンダー美人」という言葉はこういうときに使うのかもしれないと一瞬思ったほど、背が高く、笑顔のとてもきれいな奥さんなのだ。

二人は同じ地元のモンゴルのウランバートル出身で、小学校の同級生である。そのため、夫婦とはいえども、親友のような関係だと話していた。2004年の冬、友だちから晴れて夫婦になった二人は翌年の2005年の春、来日した。つまり、二人の愛の巣は「東京」になるわけだ。大学で韓国語を習い、1年間韓国に留学した経験があるバートルさんの奥さんは、私と韓国語で話をした。10年も韓国語を習っている彼女は最近の韓国語の若者言葉もよく知っていた。二人はモンゴルの大学を卒業した。バートルさんは大学で経済学を学んだが専門的な放送技術を学びたいと来日した。現在は都内の放送関係の専門学校に通い、日本の某放送関係の会社に内定している。バートルさんは、いつかモンゴルに帰国してからは放送カメラマンとして仕事をし、ドキュメンタリー番組を制作してみたいという夢を持っているのだという。また、大学の留学生別科で日本語を学んでいる奥さんは、大学院に進学し、東アジアの比較文化などの研究をしてみたいと語る。

【モンゴルのイメージ】

バートルさんがインタビューをしてみたいと考えた理由のもう一つとして、自分自身の「日本語人生」を語ることによって自分の〈疑問〉のようなことがわかるのではないかと思ったことを挙げていた。バートルさんはモンゴルで日本語を勉強しているときには考えてなかったことであるが、とりわけ差別されたり、無視されたりしているわけではない。だが、〈ここで生きていくうえでどう生きていけばいいのか〉を考え込む日々であるということだ。日本の生活が自分の人生においてたった何年という期間であるかもしれないのに、常にこのような考えを持っている、その悩みを話すことによって少しはすっきりしないのではないかと考えたようだ。お茶を口に含みながらバートルさんは話を続けた。

日本での僕は静かですね。言いたいことはたくさんある。でも、なぜか日本人と話すときには意識する。まだ表現が足りない…かもしれないけど、たぶん、僕はモンゴル人だから…気をつけないといけないかもしれないです。

パートルさんの話からは、「日本にいる僕」と「モンゴルにいるときの僕」の違いを感じていることがわかる。それは日本語で言いたいことや表現したいことが「不足」していると感じているからであろう。しかし、何か不足していると感じていることは、「日本語の問題」だけではない。生きていく上で不足していると感じること、それは「自分」であろう。パートルさんと初めて会った日も同じようなことを話していたが、本インタビューを受けてみたいと考えた理由でもある、〈ここでどう生きていくか〉という不安と心配と関係しているようだ。つまり、生きていく上で何か不足していると感じているという意味であろう。1 回目のインタビューの日は初めてパートルさんと出会った日になるわけだが、パートルさんからモンゴルのイメージについて聞かれた。

私：モンゴルのイメージですか↑イメージというか聞いたりして知っていることは…、ジンギスハンと大草原、遊牧文化、ゲルかな…。あと…モンゴルと言われると正直に言うとは今は朝青龍とか白鵬を思い出しますね…{笑}。

パートル：{アッハハハ}ゲルも知っていますか——？…。すごい——((本当に驚いたような顔で))——。…そうですね。確かに最近はモンゴルといえば相撲ですね。二人の横綱のおかげで——。

モンゴルという国に対する日本人の関心が相撲のおかげで高まっていること、そして、一人を通してその国のイメージが左右される。だからこそ〈わたしたち〉のような外国人はきちんと生活をしないといけないと彼は話しを続けた。〈わたしたち〉がきちんと生活をしなければならないこととは何か、私はその話が気になっていたが、パートルさんの語りを待つことにした。私がそのような思いにふけていたとき、パートルさんは周りの日本人に〈モンゴル人だから日本語がうまいね〉と言われることに対して語り始めた。

モンゴル語は日本語と同じ SOV 言語⁵であり、日本語の文法に近い(町田 2008)とされている。つまり、モンゴル人にとって日本語は、覚えやすい言語という意味として見なされやすいのであろう。だが、モンゴル語は決して日本語に近くないとバートルさんは語る。発音も難しく、モンゴル人が漢字を勉強することはとても大変であるからだ。しかしここで注目したいのは、バートルさんが言う〈モンゴル人だから日本語がうまいね〉、というエピソードで語りたいことである。ただ、モンゴル人が日本語を学ぶ上で有利である、ということを書きたいわけではないからだ。バートルさんが書きたいことは、日本語とモンゴル語は決して近くない、だから、横綱〔第 68 代横綱である朝青龍と第 69 代横綱である白鵬〕を含むモンゴル出身の力士は大変な努力をしているということ、彼らの努力はあまり評価せず、何かがあると〈いろいろなことを言われてしまう〉こと、それに対する不満であった。

【モンゴル人は日本語がうまいね】

外国人力士の日本語の獲得の様子が取り上げられている論文はいくつかある。石王(2005)は、「外国人力士の日本語のうまさ」の説明とともに、外国人力士が日本語を獲得していく様相が、第二言語としての外国語習得に影響する要因と密接に関わっていると述べている。

外国人力士の言語環境を調査した宮崎(2001a, 2001b, 2001c)でも、外国人力士の日本語の獲得の様子が語られている。特に、外国人力士の日本語習得が早い理由は、親方、おかみさん、兄弟子、相撲協会、ご近所管理、タニマチ、などといった特殊な環境の中で、自然習得と言語管理を行っている(宮崎, 2002, p. 122-123)からである。相撲においては外国人力士の番付の位と日本語習得が関係している(宮崎, 2001a)と述べられているが、それは、強い力士であればあるほど注目されるとともに、日本の力士としての資質が求められるからであろう。さらに、宮崎(2001a)の『外国人力士はなぜ日本語がうまいのか』においては、若かりし頃の朝青龍のインタビューを含め、モンゴル力士が紹介されている。そこには、彼らの学習法を始め、おかみさんから言葉の「しつけ」をどのように受けたのかも描かれ

5 主語(=Subject) - 目的語(=Object) - 動詞(=Verb)の語順を持つ言語を指す。日本語と韓国語、モンゴル語などのこれらの言語である。

ている。その著書で私が注目したのは、著者である宮崎氏本人の様子である。外国人力士の日本語能力はもちろん、ユーモアのセンスや心配り、表現力などに至るまで宮崎氏は驚きを隠せない。おそらく、パートルさんの周りの人々も宮崎氏が驚いたことと同じ感覚があるのではないか。優勝インタビューで話される日本語の流暢さや敬語を適切に使いこなしている様子などで、テレビを通して彼らに接する人々に、「モンゴル人は日本語がうまい」というふうに見なされるのであろう。そして、テレビでしか出会ったことのない「モンゴル人」を実際に出会い、「モンゴル人であるパートルさん」が話す日本語を聞き、「モンゴル人だから日本語がうまいね」と言い、そうしていく中で「モンゴル人」というある範疇は、「実体化」されていくのであろう。パートルさんは、アルバイトをしている日本の会社で、「日本語がうまい」横綱〔朝青龍と白鵬〕のように「モンゴル人である自分」も日本語がうまいと評価されていると見なされているのであろう。しかし、それが単なる日本語ができるかできないといったことを指していることではない。パートルさんが、〈外国人としてのわたしたち〉はきちんと生活し、いろいろな面で気を抜いてはいけないと語ったのは、「わたしたちは自国の代表でもある」ということを意味しているのである。それは自国の外に出てから感じることであり、私も幾度もそのようなことを感じたが、おそらくパートルさんは、それがかなりの重圧になっていたのであろう。「外国人力士」である朝青龍と白鵬の話が2回目のインタビューが行われた自宅でも続いたことからわかることであった。

日本語がうまいねって、日本人には言わないでしょう。

「日本語がうまいね」と日本人同士で言うのだろうか。口が達者すぎるといふ含意の冗談で用いられるかもしれないが、確かに私も聞いた覚えはない。おそらく嫌味に聞こえるかもしれないが、パートルさんが言うように日本人同士には言わないだろうと推察される。しかし、すべての外国人ではないと思われるが、多くの外国人にはそのように言われて〈無視された〉と捉えていて、また、〈無視された〉という意識は「外国人である自分」に対してであろう。だが、「日本語がうまいね」という言葉はそれほど〈無視された〉言い方ではなく、「感心した」という意味として持ちだされたのではないか。もしかして、そのように話した人の中に本当に「ほめたい」気持ちで言う人

もいるだろうし、「あなたと日本語で話ができて嬉しい」という気持ちで言う人もいるだろうし、または、何の意味もなくただ挨拶の感覚で言う人もいるだろう。しかし、良くも悪くも話す人の意図が正確に伝わらなくなることが生じるのではないか。〈わたしたちは外国人〉であるがために、「日本語がうまいね」という「外国人」全体に向けての意味として捉え、〈無視された〉と感じることも多々あるのではないか。さらに、この話の問題は、モンゴル力士に対して「日本語がうまいね」という意味であろう。その言葉には、横綱を「一人の横綱」として見ているわけではなく、「モンゴル人横綱」として見なしていると、バートルさんが捉えていることである。ここには、「もう日本に来て日本語も上手なのだから、日本の横綱としての資質を持ちなさい」という含意が隠されているとバートルさんは解釈し、「日本語が上手なモンゴル人であるバートルさんも日本で暮らす人としての資質を持ちなさい」と周りの人に捉えられていると考えているのではないか。その意識から、これから会社員となる彼は、〈この日本の社会でどう生きていくか〉という悩みを抱えていくのではないか。

【外国人らしくない外国人であるため】

バートルさんが日本語を本格的に学んだのは、大学生になってからである。高校までは英語とロシア語を習っていた。そのため、英語とロシア語は今でもある程度はできる。特に英語は通訳のアルバイトを頼まれることもあるほどだという。日本語は高校のときから独学で勉強したと語る。バートルさんが日本語に興味を持ったのはやはり大相撲の影響が大きいという。モンゴルでも日本の大相撲は大人気であり、モンゴル相撲⁶をしたこともあるバートルさんは、強い力士に憧れていたようだ。また、モンゴルのテレビで放送された日本のドラマを見て、さらに親近感を抱くようになった。それに加えて、日本で留学の経験がある親戚の影響もあり、いつかは日本で勉強してみたいという夢が芽生えたという。

6 モンゴル国には「ハルハ・ブフ」(略して「ブフ (bukh)») と呼ばれる相撲があり、モンゴル国の国技。相撲に似るが、土俵はなく、素手の二人が組み、膝や肩などが地面に着いたら負けとなる。タカやラクダなど動物の動きをモチーフにした儀礼的所作がある。日本では「モンゴル相撲」とも呼ばれる。

最初は、ウランバートル市内にある私設の日本語学校に通った。教科書での授業は、文章を読み上げたり、モンゴル語に訳したりすることであったという。その日本語学校は半年でやめた。思っていたような授業ではなく、モンゴルの物価では少々高いレッスン料であったため、自分のペースに合わせて独学で日本語を勉強していこうと考えたことをバートルさんは語り続けた。

一人でこつこつと日本語を覚えましたね。モンゴルは施設もあまりよくないですし、教科書も参考書も豊富ではないから——。僕は、日本で留学した親戚から〔譲って〕もらった本で勉強しました。どのよう
に勉強したかという、漢字を好きになりたいと思って、例えば「気」という漢字から始まる表現を覚えますね。例えば、気になる、
気にする、気がかり、気を遣う——とか、それを覚えて、いつ使うか
までは考えなくて、とりあえず頭に入れる。それをとにかく、ノート
にまとめていました。

そのノートをバートルさんは〈僕の辞書〉と名付けた。何十万語が収録されている『広辞苑』より、簡単な操作で日本語の意味を教えてくれる便利な電子辞書よりもバートルさんにとっては大事な〈辞書〉なのである。日本に来てからもその〈辞書〉に記入することは継続したという。実際に拝見したバートルさんの〈僕の辞書〉には、日本語とモンゴル語、英語とロシア語で事細かく書いてあった。つまり、バートルさんは自分ができる言語すべてを用いて〈僕の辞書〉を書き続けているのだ。また、日本語での「挨拶」や定型的な「表現」などは周りの人を真似しておぼえたという。しかしある日、少々怖い出来事があった。

道で日本人とぶつかったときに、実は1回もめたことがありますよ {アッハハハ}。新宿で少し怖そうな人とぶつかって——、それで会釈だけしたら、てめえ、なめんじゃねえぞ、と言われてー。で——、すごびっくりして——。で、そのとき、日本語で話したらまずいと思って、英語で、I'm so sorry と言いましたよ。すると、その男の人のほうがびっくりしたらしく {アッハハハ}——。何事もなかったけど……。でも、そのときは日本語で話したら殺されると思いましたよ {笑}

バートルさんは見た目で「外国人」⁷として思われたい。「一昔前、外国人イメージの代表はアメリカ人」(佐々木, 2009)であったという認識であろうか。「英語を話す外国人」=「外国人らしい外国人」=〈ガイジン〉ではない。バートルさんは、英語で話すことによって「本当の外国人」になり、その〈危機〉を免れたが、日本に来て間もないときに経験したことを機に、「日本人らしい日本語」を身に付けたいと考えたことを語る。実際、バートルさんは英語の通訳もできるほどの実力を持っている。それでも、〈外国人らしくない外国人〉であるため、日本語を日本人らしく使うこと、それが必要であると考えたのであろう。なぜなら、外見では「日本人」と見なされることもあるからだ。

バートルさんはその出来事を境にできるだけ日本語を真似しようとしたという。アルバイト先の居酒屋では「いらっしゃいませ」と「ありがとうございます」ははっきり言わないほうが日本人っぽいと判断したようだ。「あざーす」と言う日本の若者もいた。バートルさんは、繰り返しその口調を強調しながら話を続けたという。日本人の口調を真似することは外ではできないため、帰宅してから部屋で練習していたことを語る。

【名前を言わなければ誰にも気づかれない】

バートルさんが周りの日本人や俳優の口調を真似したのは、日本語が上手になりたいこともあるが、〈外国人らしくない外国人〉である自分は、日本人と間違えられることもあるため、「外国人」であることがばれることを避けたいということから始まったといえよう。その一方、日々の生活の中であることに気づく。それは名前を言わなければ誰にも外国人だとは気づかれない

7 語り手は「外国人」と「ガイコクジン」、そして「ガイジン」を語るが、これらの用語は似ているようであるが、その含意が異なっていた。「外国人」とは、「日本語以外の言語を母語としてもつ人々の総称」(岡崎, 2004)として呼ばれ、日本国籍を持っていない人が法律上「外国人」になる(佐々木, 2009, p. 245)。そして、その「外国人」である自分が生活の中で感じる自己認識を「ガイコクジン」である。さらに、「ガイジン」とは、外見から「外国人」と区別される〈外国人らしい外国人〉という意味で語られていた。したがって、これらの用語をこのような理解で読んでほしいと願うとともに、それらが何を意味しているかを考察していきたい。なお、本稿全体を通じてこの分類と定義のまま論を進めていくこととする。

いことだ。外国人だと気づかれないこと、バートルさんはそれを実践していくことになる。

バートルさんの本名は少々長い。「バートル」という名前は愛称である。初めてわかったことだが、モンゴル人に苗字はないという。日本で言う苗字やアメリカのファミリー・ネームのようなのは貴族の一族だけが持っていて、一般の人は、「父親の名前」が組み合わせられるという。たびたび、朝青龍を喩にして申し訳ないが、(バートルに説明されたことを話すと)例えば、朝青龍の本名は「ドルゴルスレン・ダグワドルジ」である。そのうち、「ドルゴルスレン」が父親の名前で、「ダグワドルジ」が本人の名前であるという。つまり、「ドルゴルスレンの息子ダグワドルジ」と解釈される。バートルさんの名前も朝青龍のように父親の名前と自分の名前、二つの名前の組み合わせで作られたのである。「朝青龍を‘ドルゴルスレンさん’と読んだら、朝青龍のお父さんと呼ぶことになりますね」、と初めて聞いた話に私が驚いた表情を見せたら、二人は私が理解したことを嬉しく感じたのか、「そうですね」と言いながら微笑んでくれた。

さらに、一人ひとりの「名前」には意味がある。「バートル」という名前は「英雄」という意味である。朝青龍の名前「ダグワ」とはラマ教の「神様の名前」と「ドルジ」という「強い」という意味を持つ。強い朝青龍にとても似合う名前ではないか。また、白鵬の名前は「ダヴァジャルガル」だが、「ダヴァ」は「月曜日」という意味で、「ジャルガル」とは「幸せ」を意味している。白鵬は、月曜日に生まれたのであろうか。なんて素敵な名前なのか。私は感動して思わず声を上げて幾度も「素敵だ」と話した。「月曜日の幸せとは」。きっと横綱白鵬の家族は彼が生まれた月曜日になると改めて幸せを感じるのであろう。最初はややこしいのかなと思ったが、とても意味の深い名前が驚いた。すべての名前に「意味」があるということに改めて感じる瞬間であった。バートルさんは日本語の勉強の際に漢字を主に勉強していた。その中で、日本の苗字に興味を持ったという。読み方は難しいが、日本人の名前を覚えることが好きだった彼は名前を覚えながら日本語の勉強ができる、そう考えていたようだ。

日本で生きていく中で「名前」の持つ意味とは何か。バートルさんは「名前」で外国人を特定づけることができると考えていたのであろう。そして、

外国人として気づかれたいために、名前を言わなければ誰にも気づかれたいと感じたのである。素敵な意味を持つ自分の名前であっても、その意味を知らない人には「異質」な名前として捉えられてしまう。パートルさんは「異質感」を感じたくなかったのであろうか。パートルさんは、日本人に間違えられたとき、「楽」だと感じたことを語る。もちろん彼は、モンゴル人として誇りを持っている。しかし、時々名前を書いて待たなければならないレストランに行ったときは、自分の名前ではなく、周りの日本人の苗字を借りて書くときがある。例えば、専門学校の先生である「金子」や俳優の木村拓哉の苗字を借りて「木村」になる。そのようになったのは、おそらく、「楽」だと思ったとき以来からかもしれないと、語り続けた。

最初は、僕の名前を書きましたよ。でも、呼ばれるでしょう？（奥さんが隣でパートル様と呼んでしまったため 3 人で思わず笑ってしまった。）そのときに、並んでいる人が僕のほうをみて、ナニジン？みたいなことを言っていて、それを聞いてちょっと僕は気になったかもしれないませんが……。

名前を言わなければ外国人とわからない。そのときは〈なぜか楽〉で、〈安全なところにいる感じ〉がすると、お茶を口にしながら少々恥ずかしように語ったパートルさんの言葉を複雑な心境で聞いていた。決して「楽」だというように受け止めることができなかったからだ。突然語り始めた話は、彼の今の状況を物語っているのではないか。

また、レストランで「一二三」〔ヒフミ〕ではなく、「木村」や「金子」とする理由は、「ヒフミ」も日本では珍しい名前、その名前を書き、それで呼ばれたらみんなに見られるのが嫌だと語る。田中（1996）は、「日本国内ですら、慣れ親しんだ名前でなければ異様さが感じられる。聞いたこともない異様な名は、おそらく慣れないことば、慣れない習慣などと一体になっているだろう」（p. 87）と述べている。「均質的」な環境の中にやってきた「異質な存在」という状況を解決するための現実的な方法」（ハタノ 2009, p. 13）であらうか。パートルさんは、仮想ではあるが、日本名を持つことによって「日本人」と見なされたい。それは呼ばれたらみんなに見られる名前に「異質感」を感じ、それによって「排除」されたくないと思っていたのであろう。さらに彼は、留学生の中には日本風の名前にすることが多

いことを挙げながら、それは日本人のように見られたいからだと言っていた。日本語学習者はよく日本風の名前を作る。漢字で自分の名前を作る人も多くいる。例えば、「Michael Jordan」の場合は「舞蹴丈団」という具合に。しかし、その多くが少しでも異質な名前は異質者として見なされるからそのようにつけているとは思われない。英語名の名前を漢字で作って楽しんでいる人も周りにはいるからだ。つまり、「外国人」すべてが異質者として見なされたくないためそのように日本風の名前をつけているわけではない。だが、バートルさんはそのように捉えていたのだ。

【モンゴル人としての自分らしさ】

朝青龍は自分らしさを出しすぎたんだと思いますよ。

バートルさんは、朝青龍の話を選び持ち出した。バートルさんが話す朝青龍の「自分らしさ」とは、モンゴル人としての「自分らしさ」であることがわかる。この語りは、相撲は日本の国技であり、日本の文化を代表するから「日本人らしさ」を求めているのに、「ドルゴルスレン・ダグワドルジ」という本当の自分らしさを出しすぎだ、という意味なのであろうか。朝青龍の自由な行動を責める際に持ち出される「自分らしさ」は、つまり「モンゴル人」としての自分らしさである。ゆえに、国の代表として日本に来ている「個人」も「モンゴル人」という根拠のない「いじめの材料」になる可能性を語っているのであろう。この話の後、しばらく沈黙があった。

朝青龍の日本語は日本人には許せない日本語だったと思います。僕はテレビを見るたびに、そんな感じがして――。

バートルさんは、テレビで朝青龍が話題になるたびに、〈モンゴル人はみんなヤンチャな行動をするのか〉と周りの人に言われたという。つまり、バートルさんは自分自身が「モンゴル人」としてしか見なされていない気がしたと考えたのであろう。自分が礼儀正しく振舞うことで、朝青龍のような悪い評価をされることを恐れていたのであろうか。

確かに、横綱朝青龍のおかげでモンゴルを身近に感じることもあり、私が相撲を好きになったのも朝青龍のおかげである。土俵の上の朝青龍は強く、何かをひきつける魅力がある。テレビで見たお茶目な姿やバラエティー番組で観た歌の上手さ、メディアがあおっていることもあるかもしれないが、「その人らしさ」は、見たこと、感じたことで判断しようとしている。その

気持ちを私は伝えず、複雑な気持ちで彼の語りを聞いていた。

モンゴルと日本は類似点が多い。時差も1時間しかなく、顔も似ており、日本人も蒙古斑(Mongolian Blue Spot)がある。また、モンゴルも国技が相撲である。似ているようで、しかし、モンゴルと日本の心理的な距離が遠く感じられる日々の中で、バートルさんは周りの日本人を真似し、日本語を言うこともしなくなったという。

〈日本にいる僕〉と〈モンゴルにいるときの僕〉が異なると認識しているが、それを日本語の能力が足りないからであるとバートルさんは述べていたが、その奥深くには、朝青龍のように「自分らしさ」を出しすぎではいけないと考えたのであろう。

バートルさんは学生時代からモンゴル相撲においても才能を見せるなどスポーツ万能であった。高い背を活かし、バスケットボールや陸上競技にもたびたび出場した。歌も上手であり、いつもリーダー的な存在であったという。そんなバートルさんはどこへ行っても人気者であったようだ。それがモンゴル人としての「自分らしさ」としての「自分らしさ」として認識している。そのため、周りの日本人に「自分らしさ」をすべて出してはいけないと考えているからなのか、日本に来てからは自宅で過ごす時間が多い。さらに、少々静かになった気がし、モンゴルにいたときの自分とは異なる感じすらしていると思っているのである。いつからか〈礼儀正しいモンゴル人〉としていたい気持ちが強くなったのであろう。

僕は礼儀正しくいたいですね——。まあ、礼儀正しいというか、口数が少ないほうがいいことが多い気もするし、モンゴル人として礼儀正しくして、なんと言うんですか——まあ、会社員になるので、いろいろやっていかないといけないですし——{笑}。

バートルという「人間」は「モンゴル人」である。自分は二人の横綱のように有名人ではないが、自分の行動が「モンゴル人」を決めつける判断材料になりかねないと考えているのであろう。バートルさんが考える「礼儀正しさ」とは、多くのことを話さないことでもある。日本語の〈特徴〉について自分を見せてはいけないと語るのは、それと関係している。自分らしさを出しすぎではいけない。モンゴル人としての自分らしさを出しすぎると日本人に許せない日本語となってしまう。バートルさんは、日本語ではきちんと挨拶

拶をすること以外、自分を見せるようなことを話さないという意味で、〈礼儀正しいモンゴル人〉を实践したいと考えているのであろう。

【そうありたくない自分——排除されたくない自分】

バートルさんはこれから日本で仕事を始めることになる。いつまで日本にいるかわからないが、もしかして日本で子どもが生まれるかもしれない。バートルさんは、最初、ある一定期間を日本語と専門的な技術を学びにきた「留学生」として過ごした。会社に就職した理由は、キャリアを積みたいこともあり、大学院で研究をしてみたい、という勉強熱心な奥さんのためでもあったという。したがってバートルさんは、「生活者」としてこれからも「日本語」を使いこれからも「日本語」を使い、「ここ」で生きていくのである。そのような彼が、〈礼儀正しいモンゴル人でありたい〉と考えているのは、日本の社会で排除されたくない「自分」と自分の日本語を語っているのであろう。そうありたくないため、〈礼儀正しいモンゴル人〉にならねばと思ったのではないか。

「日本人らしさ」を求められた朝青龍。「自分らしさ」を出しすぎた朝青龍。バートルさんは「自分らしさ」を出しすぎた朝青龍を語るが、「日本人らしさ」を求められた朝青龍の姿を自分の境遇に重ね、語っているのであろう。横綱白鵬は、元々優しくて穏やかな性格であると語る。それは日本人に受け入れられる。しかし、少しでも目立ち、言葉がストレートだとそれは「日本人らしくない」ことにつながると考えているのであろう。

バートルさんは、朝青龍の自分らしさは語ったが、自分が思う「自分らしさ」については語らなかつた。私はそれが心に残っている。苦しい稽古をし、モンゴルの草原を恋しく思いながら日本で寂しい思いで生活を送っていたはずのモンゴル人力士のように、みんなが遊んでいる時間に日本語の単語を覚え、人を観察し、真似をして身に付けたものを周りの人に確かめては直し、また確かめて直すこともした。簡単には覚えられない日本の漢字や表現を身に付けようと努力してきた日々の日本語の「稽古」と寂しい日本の暮らしを送っているバートルさんは、外国人力士の境遇と自分を重ねていたのではないか。

初日、モンゴルのイメージを私に質問した理由とは何か、今回インタビューに応じた意味とは何か、私は幾度もインタビューの場面を思い出し、彼の「日本語人生」が語る意味を考えていた。そして、勝手ながら彼の心を

私が解釈してみると以下のように言える。

「みんな僕がどういう人なのか知らない。知ろうとしない。なぜなら、モンゴル人というイメージの中で僕を評価している。」

モンゴルがどこか知らない。でも、モンゴルのイメージがある。ある「モンゴル人」の一人が、良いことをすると良いイメージが働くが、少しでも良くないことをすると悪いイメージが強調される。パートルさんはそれを言っているのではないか。インタビュー時の彼は、日本語を真似して勉強したときや、夢を語るときにおいては、ポジティブな面を見せた。パートルという名前はレストランで呼ばれたときには恥ずかしかった名前である。だが、〈わたしたち〉とのインタビューにおいてはそのように呼ばれることに関して恥ずかしくもなく、笑いが出てきた。それはおそらく〈わたしたち〉はその話を語り合い、互いが理解しあっていると考えるからであろうか。私はモンゴルの素敵な名前を語るパートルさんがリラックスしているようにうかがえた。何より、良く笑っていたことが印象深い。だが、日本にいる自分とモンゴルにいたときの自分の違いを語るパートルさんの表情は一変した。

日本の大相撲を愛したパートルさんは、朝青龍も自分と同じように相撲を愛していたこと、ただ、同じモンゴル人であることだけで応援しているのではなく、少しでも「その人らしい」一面を認めてほしいと言っているのであろう。

パートルさんの語りを聴きながら、「人間」はイメージの王国に住んでいるのではないかと考えた。イメージのからくりは、「そうなんだ」「そうかもしれない」「そうかな」というイメージがくるくる回っているだけであって、決して無くなることはない。一度もモンゴル人に出会ったことのない日本人を始め、多くの人は、モンゴル人は日本語が上手なのだというイメージで判断し、「そうかもしれない」と決めつける、しかし、実際話してみてもそれは違うのではないかと思ってもまた新たにやはりそうだと考えるのであろう。それでは、そのようなイメージはどうすれば克服していけるのか。根ざした固定概念を乗り越えるためには日本語教育で何ができるのか。私はそれを差異の見直しから始めたい。

4. 「差異」をもつ〈わたしたち〉の問題

〈わたしたち〉はまったく同じ経験ではないはずだが、まるで同じ経験をし、共感しているという安心感があることで語られた。〈わたしたち〉はどのように「共感」から呼び起こされるのであると言えよう。しかし、「わたし」を常にその〈わたしたち〉の枠内で規定し、その「わたし」の他のあり方の可能性が閉じてしまっている。なぜなら、〈わたしたち〉にとって他者は絶対的な枠組みとして置かれており、恣意的に設定された〈わたしたち〉という「差異」を固定的なカテゴリーとして強化することにより、〈わたし〉として《差異》のあるさまざまな他者との関係性を結ぶことはできず、〈わたしたち〉、「日本人」のカテゴリー化の「差異」のみが強化していくのではないかと見て取れる。このような「差異」の絶対化により、〈わたしたち〉と「日本人」を分け隔てる境界が作られ、そのことだけではなく、〈わたしたち〉の中の「他者」をさらにカテゴリー化していくことであろう。

また、〈わたしたち〉の中には、外見で「外国人」であると見なされる「ガイジン」がいて、その「ガイジン」が、英語ができるのならもっとも「外国人らしい外国人」である。しかし、外見で「外国人」と見なされなく、日本人とあまり区別のつかない「外国人」もいる。それは「外国人らしくない外国人」、「見えない外国人」（鄭，2012）である。さらに、自分が属する「外国人」というカテゴリーを、「他者」より優れているとは考えない。「外国人らしい外国人」は日本語ができなくても許せられるが、「外国人らしくない外国人」は、日本人と区別がつかないため、「日本人らしい日本語」をより一層求められると捉えている。パートルさんも、外見では外国人であると見分けられない「外国人らしくない自分」は、やはり「日本人らしくなる」ことのほうがよいと考えたことを語った。

このようなカテゴリーは「序列化」していくことになる。それが「差異」からの問題であることは言うまでもなく、このような序列化の問題は、「差異」により「差別」を感じることである。「差異」をもつ〈わたしたち〉は自らをカテゴリー化し、「差別」されたと感じ、「排除」されないための選択をしている姿も見られた。例えば、パートルさんが自分の名前から「ナニジン」なのかを想像させたくないと考えていたことから明らかである。「モ

ンゴル人」であり、「外国人」であるバートルさんは「排除」されないために、モンゴル人としての自分らしさを出せないと考えた。自分の名前の代わりに日本人の名前を借りることで「同化」を実践していたのであろう。むしろ、「同化をしている」という意識はなかったかもしれない。なぜなら誰も「日本人に同化せよ」とは言わない。とりわけ「差別」をされているという感覚もない。それでも日本の社会で生きていくことに悩まされ、なぜか「排除」されないために気を使っている自分がいることに気づいたと言えよう。それは「外国人」である自分に対する「同化のまなざし」を感じたからであろうか。そしてバートルさんは、モンゴルにいるときより静かになったことを「日本語が足りないから」であると捉えることで「外国人」である自分を正当化しているといえよう。

また、バートルさんは「排除」される自分に悩んでいたのではないか。その「排除」とは、「同化」を拒否してしまったときに起きることであると、そう考えていたのであろう。彼は、モンゴルの文化と言語を日本の文化と言語に吸収されたくないと考え「同化」と「排除」に悩んでいたのであろう。私はバートルさんの語りが胸に残っている。それは「外国人」というカテゴリーと、社会的弱者としての〈わたしたち〉は「同化」しなければならないものであるという考え方により、そのように判断せざるを得ない状況に置かれたからであろう。「外国人」は「同化」しなければならないと見なし、「外国人である」からこそ、という判断を伴う。「同化の有無」、「同化の圧力の問題」といった議論も確かにあり、その問題を問うことも重要であるが、日本語教育において学習者が語る「同化」の問題は、民族性の犠牲を伴う同化と同一視することではなく、「同化政策」とも区別し、たとえ、そのような同化の圧力があつた場合でも、その現実から学習者がそれを向き合っていくような日本語教育が必要である。私は、《差異》を互いが認め合い、肯定的な自己意識を持ち、自分の能力や才能を自覚し、かつ発揮していきながら満足感や自信につながる「日本語」の教育が必要であると考えているのである。それでは、そのような「日本語」とはいかなるものであり、《差異》を生きたことばの教育へ展開していく日本語教育の課題とは何か、次章にてそれらを述べることにする。

5. 「わたし」と「他者」という《差異》を生きることばの教育へ

近年、アイデンティティの諸相は全体的で唯一である観点から「関係性」へ移行しつつある。アイデンティティを他者との対話的關係に依存するものであると捉えたテイラー（1994/1996）は、「関係性」への議論を主張した。またホール（1996/2001）は、「差異は外側においてではなく、差異を通して構成され（中略）アイデンティティが構成されるのは、大文字の他者との関係、自らとは異なるものとの関係を通してである」（p. 13）と述べ、アイデンティティが他者という「差異」がなければ成立しないとしていることがわかる。ニュアンスの違いはあるが、アイデンティティを「差異」の関係であると捉え、他者との関係を打ち出したコノリー（Connolly, 1991/1998）も同様の主張であろう。

人はさまざまな境界を生きていて、アイデンティティは《差異》がなければ成立しないとする議論に私も賛同する。しかし、ここでの《差異》は、「絶対的な差異」になってはならない。ここで「絶対的な差異」と括るのは、他者を絶対的と見なすことへの懸念である。

コノリー（1991）の言う差異を前提としたアイデンティティを、〈わたしたち〉のアイデンティティにおいては、相対的なものとして捉えられずにいた。それは、アイデンティティが、絶対的で同一性を強調すると排除につながる恐れである。例えば、「日本人らしい日本人」という同質で均質な「日本人」の強調は、〈わたしたち〉という「他者」を排除し、「差別」の感覚を覚えさせる。しかし換言すれば、そのように自分とは異なるものを排除することにより、「われわれ」の同質感が強化することにもなるのではないか。それゆえ「関係性」への移行は、「わたし」と「他者」という《差異》を生きる関係性でなければならない。

〈わたしたち〉は「外国人らしい外国人」であるゆえの悩み、「外国人らしくない外国人」、「見えない外国人」として葛藤していた。日本語教育は、そのようなことを気にしなくても良いと思える教育をしなければならないのではないか。彼／彼女らは日本語を学んだことを「期待」と「希望」で始めたわけである。日本語はそのようなものでなければならない。「日本人」と〈わたしたち〉を際立たせる日本語を乗り越え、日本語が自分のものであり、そ

の日本語を通して多様な人間関係を気づいていくことができるのではないか。

パートルさんはモンゴル語を話す自分を「自分」であると捉えている。その自分が「本来の自分」であり、「ありのまま」の自分であると考えからであろう。朝青龍の自分らしい行動を「モンゴル人としての自分」であると捉え、それによって排除されていると考えたのは、「〇〇人としての自分」という固定された考えからであろう。つまり、「自分の日本語」を自分のものではなく、日本人のものであるとしか考えない場合、そこでの「自分」とは、〈わたしたち〉で語られた「自分」、日本人と「差異」をもったままの「自分」となり、二分化された「差異」が働く。それにより日本語も二分化され、序列化していくことは言うまでもない。したがって、「差異」の感覚から呼び起こされ、「日本人」と〈わたしたち〉を際立たせる日本語を乗り越え、日本語が自分のものであり、その日本語を通して多様な人間関係を気づいていくこと日本語教育が必要であろう。

つまり、「差異」を乗り越えることは、《差異》を生きることでは解決できないと考える。《差異》を生きることとは、互いを認め合うこと、自分自身がどう名乗り、どう生きるかを一人ひとりに帰属することによって、「〇〇人」という「差異」から「わたし」と「他者」という間を生きぬくことである。そのために必要なのが「自分のことば」であろう。

「わたしは〇〇である」と語るパートルさんの物語には、「〇〇人」という「国籍」、「人種」、「エスニシティ」が東に語られていた。パートルさんは「モンゴル人」であり、「外国人」であり、「学生」であり、「男」である。モンゴル人であるが、「ウランパートル」出身であり、学生であるが一家の「大黒柱」でもある。このように「わたし」を規定する幾多の《差異》はこのように交合に絡み合っているからこそ、「わたし」をどう名乗るかが重要であると考えられる。わたしたち人間は多くの差別と差異の中で生きている。「差異」があることは当然であるとするのではなく、差異、つまり「違いがある」ことを認め、人と人がどのようにつながるかを、ことばの教育で考える必要があるのではないか。そのようなことばの教育を今後の課題として考えていきたい。

文献

- 石王敦子 (2005). 外国語学習に影響する要因『追手門学院大学地域支援心理研究センター紀要』2, 18-28.
- 池田清彦 (1992). 往復書簡——差別と表現. 柴谷篤弘, 池田清彦 (編)『差別ということば』(pp. 13-39) 明石書店.
- エマーソン, R., フレッツ, R., ショウ, L. (1998). 佐藤郁哉, 好井裕明, 山田富秋 (訳)『方法としてのフィールドノート——現地取材から物語作成まで』新曜社.
- 岡崎眸 (2004). 「共生言語としての日本語」教育——その具体例と意義. 小山悟, 大友可能子, 野原美智子 (編)『言語と教育』(pp. 281-294) くろしお出版.
- フェルドマン, O. (2000). 差別. 猪口孝, 大澤真幸, 岡沢憲美, 山本吉宣, S. R. リード (編)『政治学事典』(pp. 406-407) 弘文堂.
- 佐々木てる (2009). 「外国人」とは誰か——在日コリアンの社会的地位と変化と「外国人」カテゴリー. 好井裕明 (編)『排除と差別の社会学』(pp. 244-265) 有斐閣選書.
- ホール, S. (1996/2001). 誰がアイデンティティを必要とするのか?. スチュアート・ホール, ポール・ドゥ・ゲイ (編) 宇波彰 (訳)『カルチュラル・アイデンティティの諸問題』(pp. 7-35) 大村書店.
- 田中克彦 (1996). 『名前と人間』岩波書店.
- テイラー, C. (1994/1996). 承認をめぐる政治. A. ガットマン (編), 佐々木毅 (訳)『マルチカルチュラルリズム』(pp. 37-110) 岩波書店.
- 鄭京姫 (2011). 自分らしさを規定するもの——〈わたし〉を語るひとりの日本語学習者のライフヒストリーから. 細川英雄 (編)『言語教育とアイデンティティ』(pp. 159-178) 春風社.
- 野家啓一 (2007). 物語論の可能性. 宮本久雄, 金泰晶 (編)『シリーズ物語論 1 他者との出会い』(pp. 1-23) 東京大学出版会.
- ベルトー, D. (1981/2003). 小林多寿子 (訳)『ライフストーリー——エスノ社会学的パースペクティブ』ミネルヴァ書房.
- ホッグ, M. A., アブラムス, D. (1988/1995). 吉森護, 野村泰代 (訳)『社会的アイデンティティ理論』北大路書房.

- 町田健 (2008). モンゴル語『言語世界地図』新潮社.
- 三橋修 (1988). 差別. 見田宗介, 栗原彬, 田中義久 (編) 『社会学事典』 (pp. 337-338) 弘文堂.
- 宮崎里司 (2001a). 『外国人力士はなぜ日本語がうまいのか』 明治書院.
- 宮崎里司 (2001b). 外国人力士の日本語インターアクション能力: イマー
ジョンプログラムのモデルとしての習得環境『21世紀の日本事情』 3,
70-81.
- 宮崎里司 (2001c). 外国人力士の日本語習得と学習ストラテジー: 社会的
ストラテジーを中心として『講座日本語教育』 37, 71-83.
- 宮崎里司 (2002). 外国人力士の日本語習得: 言語管理と自然習得『早稲田
大学日本語教育センター紀要』 15, 119-131.
- 好井裕明 (2007). 『差別原論:〈わたし〉のなかの権力とつきあう』 平凡社新書.
- ハタノ, リリアン・テルミ (2009). 『マイノリティの名前はどのように扱
われているのか——日本の公立学校におけるニューカマーの場合』 ひ
つじ書房.
- Bruner, J. S. (1990). *Acts of meaning*. Cambridge: Harvard University
Press. (ブルーナー, J. (1999), 岡本真木, 仲渡一美, 吉村啓子
(訳)『意味の復権』 ミネルヴァ書房.)
- Connolly, W. (1991). *Identity / difference: Democratic negotiations of poli-
tical paradox*. Cornell University Press. (杉田敦, 齋藤純一, 権左武
志 (訳) (1998)『アイデンティティ/差異——他者性の政治』 岩波書店.)
- Memmi, A. (1968). *L'homme domine*. Gallimard. (メンミ, A. (1971), 白井
茂雄, 菊池昌実 (訳)『差別の構造——性・人種・身分・階級』 合同出版.)
- Tajfel, H. (1981). *Human Groups and Social Categories: Studies in social
psychology*. Cambridge University Press.
- Tajfel, H., & Turner, J. C. (1986). The social identity theory of intergroup
behavior. In W. Austin & S. Worchel (Eds.), *Physical of intergroup
Relations* (pp. 7-24). Nelson-Hall.
- Turner, J. C. (1987). *Rediscovering the social Group: A self-categorization
theory*. Blackwell. (蘭千壽, 磯崎三喜年, 内藤哲夫, 遠藤由美 (訳)
(1995). 『社会集団の再発見——自己カテゴリー化理論』 誠信書房.)